世界に通用する人材が育って欲しいけれど

西田正規
人文社会科学研究科

不安定社会

現代社会の最も重要な特徴は、何といってもその激しい変化にある。私の父は車の運転も、パソコンや携帯電話を使うこともなく一生を終えたが、この社会では、親世代の暮らしを支えた知識や経験の多くが子世代には時代遅れになり、あるいは、若い時に学び取ったことが生涯役に立つとは限らない。変化の激しい不安定な社会では、全てがそそくさと色褪せてゆく。

文明社会以前の人類は全く異なる状況にあった。たとえば180万年ほども前のアフリカに成立したアシュール石器文化は、その後150万年間にもわたって続いた。あるいは縄文時代の生活技術や社会の仕組みは、一万年もの間ほとんど変化することがなかった。文明以前の技術や知識は、何千年、何万年も安定して続くことがむしろ普通であった。親世代から学んだ知識や技術は、子世代の生活を保証するばかりか、子々孫々までの暮らしを支え続けたのである。

人間は何をするにも学ばなくてはならない。自ら学ぶことも多いが、親世代から学ぶことはさらに多い。そのようにして親世代から子世代へと学び継がれる知識や技術の全体を広い意味での文化という。しかし現代社会における文化は子供世代の生活さえ保証できない。激しく変化する社会の文化は脆弱であり、末長く人類の生活を保証しうる安定した文化はすでにない。一般に文明社会は高度な文化を持つと見なされるが、その意味において私は、むしろ文明社会は文化を失いつつあると考えている。

人間には知恵があるとしても、しかし人生は短く、個々の人間の知恵や知識は未来には届かない。子々孫々にまで受け継がれる文化がなくては、優れた知恵も霧散するばかりである。文化を失った人類社会は、また同時に未来への手掛かりを失うことになる。

数百万年の人類史を通じて、これほど激しく変動する社会は存在したことがない。まさに未曾有の事態である。だが現代社会に生きる人の多くは、それをことさら異常とも思わず、むしろ大半は、自ら進んで変化の渦中に飛び込もうとする。人々は新しい知識や道具を求め、国家や企業は拡大や革新の道を探り、そして大学は最先端を売り物にする。だれもが、ただ遅れないようにと力まかせにアクセルを踏むのであるが、しかし一体どこへ行きたいのか。

頼りになる文化も未来も失った社会は、今日あしたの生き残りにしか関心を持てなくなるのは当然のことだ。覇権を巡る国家間の競争から、企業や教団間の競争、さらには受験や昇進に至るまで、現代社会はたえず私たちをより厳しい競争へと追い立てる。この流れのままに国立大学が法人化された。業績や効率に劣る大学は、教職員もろとも切り捨て可能になったのである。

希望

大学を競争的環境に置くにしても、一体何を目指し、何をもって大学の業績とするのか。我が筑波大学には、ノーベル賞受賞者を学長に据えようと考える人が多いようであるし、また、受賞者を出すことを大学の目標に据えてきたところがある。そのような大学の姿勢を見聞きするたび、私は少なからず恥ずかしさを感じてきた。受賞はおめでたいこととしても、受賞を目標にした研究や大学運営などというのは本末転倒も甚だしい。

どんな分野でも未知への探求は研究の原点であり、それが私たちを夢中にさせる。研究活動への最も深い素朴な動機は、受賞や名声などとは全く関係のないところに存在する。私は、心の底から沸いてくるそのような研究や教育の動機が、この大学に広く息づいていて欲しいと願っている。だが競争的な評価は、そのような素朴な研究動機を侵食するだろう。

この大学で耳にするもう一つの不愉快な事は、「卒業生が一流企業に就職してね」などと自慢する態度である。そもそも学生がどこへ就職しようと、それは本人の思想や信条、能力に関わるプライベートな問題である。大学や教員が気軽に扱うことではなく、ましてや自慢のネタにすることではない。それを教育業績としてひけらかすような精神は、素朴な研究の動機から最も遠い所にあると思うからである。

そしてまた、「世界に通用する学生を育てるための戦略」という本特集のテーマを見てガックリする。我が筑波大学は、このように薄っぺらなキャッチコピーを研究教育の基本方針としたいらしい。そして結局は、一流企業や一流組織に就職した卒業生

の数をもって教育の業績とするのだろう。私には、そのような発想の低俗さが堪え難い。

おそらく多くの教員がすると思うが、私は新入生への授業で、学ぶことの意味をもう一度しっかり考えて欲しいと話す。大学に合格して受験勉強の目標は達成したが、入学後の目標を見出せない学生は多い。受験競争は、彼らを当面の勉強に駆り立ててはきたが、それが、本当の意味での学ぶ動機や生きる意欲を育てるとは限らない。競争的な環境は人間を当面の努力に向かわせるが、それは鞭から逃れようとしてひたすら走る馬と同じであり、希望に向かっての努力ではない。むち打たれて走るだけの人間には、未来も満足もありえない。

それは大学も同じであろう。追い立てられるのではなく、大学自身が目指すべき未来について明確なイメージや目標を持たなくてはならない。それがなければ教育や研究など、そもそもはじめから成り立たないことである。未来の方向を指し示すことは、大学が果たすべき重要な使命であり、また、大学が示すビジョンへの共感があって始めて学生諸君は、真剣に学ぶ姿勢が取れるのだろう。

責任

新入生には、人生を楽しく豊かに生きるために、平和で安全な社会を築くために学んで欲しいと話す。単純ではあるが、学ぶ動機の原点はそこにしかない。輝くような新入生の眼の光が消えるようでは、この社会の未来はない。大学は彼らの眼の輝きを失わせてはならない。だが現実には、学ぶ意欲を減退させる学生がかなりの比率で存在する。

目指すべき未来のイメージを持つことは、研究教育の場には必須の条件であり、また魅力的な人間や組織であるための条件でもある。かつて日本人はエコノミックアニマルと蔑まれたが、目指すべき未来のイメージを持たず、ひたすら当面の利益や業績を追うだけの人間や社会は無気味でしかない。

激しい変化の中で文化と未来が失われつつあるとき、確かな文化を再生することは大学が担うべき最重要課題である。それなのに、ノーベル賞や最先端を売り物にしているようではピンボケもいいところであり、若者たちが共感してくれるとは思えない。大学は未来に対するビジョンを示し、それに対するたゆまぬ努力を重ねなくてはならない。筑波大学が、世界に通用する学生を育てたと誇れるようになるのは、その後のことである。

(にしだ　まさき／歴史・人類学)